騎士よ、音より早く追え　―仮面ライダードライブ異伝・マッハ×チェイサーVS仮面ライダーW―

たんぺい

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仮面ライダードライブと仮面ライダーＷのクロスオーバー作品です

…でもメインはマッハの予定です

よろしくお願いします

目次

プロローグ：罪の数 ―― 1
第一話：詩島剛 ―― 5
第二話：仮面ライダーW ―― 15
第三話：追跡者 ―― 23
第四話：地球の本棚 ―― 30
第五話：仮面ライダースカル ―― 36
第六話：失敗作 ―― 46
第七話：集結 ―― 55
第八話：スカルドーパント ―― 62
第九話：最期の『S』／骸骨（スカル）と罪（シン）の『S』 ―― 69
最終話：剛はその姿を乗り越えられるのか？ ―― 75
エピローグ：仮面ライダーの、明日 ―― 82

プロローグ：罪の数

その、大きな硝煙が晴れた後には…帽子をかぶった「骸骨」が立っていた。

そして、その反対側には、３人の男女が転がっている。

その内の１人が言う。

「貴様…最低で最悪で愚かな決断だぞ！我々に逆らって…ただで済むと思うのか！」

別の１人が言う。

「貴方、本気で改造されたいらしいわね…！」

最後の１人が言う。

「凄いな…コレが、君の力なのか」

そんな３人の人間を、実にくだらないものを見るかのように見下ろし、骸骨は呟く。

「男は…自由で有るために、己の魂を曇らすものを、愛せない」

その骸骨は、どこからか取り出した拳銃を抜く。

「貴様らは…それだ、貴様らは、俺達の街を…泣かせる」

マキシマムドライブ…そんな機械音が、拳銃から放たれる。
「俺は…守るべきものを守りきれないまま他人に預けた…そして、責任を果たせないままに1人で逝った…そして、臆面もなく今ここにいる…俺は俺の罪を、数えたぜ…！」
誰かに聞かせるでも無く叫ぶ骸骨は、その3人に向けて、拳銃の引き金を引いた。
「さあ、お前の罪を数えろ…！」
そう言うと、その骸骨の銃から放たれる弾丸は…巨大な爆発を上げて、その3人を飲み込む。
その爆発を確認した骸骨は、すたすたと、その場から離れた。
カツン…カツン…
そんな靴音を立てて歩く骸骨は、その表皮が徐々に、まるで固茹で玉子の殻を剥くかのように、その正体を暴くのである。
その正体は…帽子こそ骸骨の時そのままながら、その姿は白亜のスーツを着た、壮年の男だった。

ただならぬ眼光、整えてないもみ上げ、掘りの深い顔。
そのスーツ姿にあいまって、まるでヤクザのようにも見える。
少なくとも、カタギの人間とは…思えないだろう。

そのスーツ姿の男は、帽子のつばを右手でくいっと深く被り直すように下げると、自嘲するように、呟いた。
「ガイアメモリは…出来れば使いたく無かったのだがな…」
そう言いながら、己の右手に握られた…黒いＵＳＢメモリのような、黒い棒を見る。
その棒には『Ｓ』と言う文字が、骸骨の形をかたどって描かれている。

「つくづく、救えないな」
その男は…少しだけ悲しそうな表情で呟いた。
「俺は…あれだけ人にえらそうな事を言っておきながら……未練ばかりだ、思い返せば…娘の結婚式一つ、顔を出せない、愚かな親だから……な」

そう言うと、その男の周囲の時は…まるで止まったかのようだった。

「…恐らく、神様のいたずらだ……時間は無い、望んだ結果にはならない……ならば」
雨も、風も、草木も止まる、まるで鉛のような世界の中で、その男は決意するように言った。

「せめて、弟子の卒業式ぐらいはしてやろうか…帽子が似合う程度には、なっているのかな？」
その男…鳴海荘吉は、かつての彼の庭である街。

風都へと、足を運んだ。

第一話：詩島剛

1人の若人が、白を基調とした大型バイクを疾走らせる。
その速さはまるで、風のようである。
何かに追われる様な…否、何かを追うように、そのバイクは…風都と言う街を疾走していた。

そのバイクのライダー…詩島剛は、ため息を一つ吐いた。
「進兄さん…警察に、公務員にとらわれるのも大変だよな…こういう時に、フットワークに支障を来すんだから……」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

事の起こりは、3日前だった。
『進ノ介、剛!…大変だ!』
久留間市の警察署地下、その秘密施設。

その中で、鎮座ましましとばかりに、銀色の台座に据えられたベルトが、二人の青年に向けてしゃべる。
そのベルトは続ける。
『重加速反応…それも、超進化体クラスのロイミュードの反応だ！』

ロイミュード
希代の天才、蛮野博士の生み出した悪の機械生命体。
己の欲望をとめられぬ、獣のような存在であり、…少なくとも、剛の中では…理性無き破壊者である。
彼らの目的はただ一つ、進化体を目指すこと。
バット・コブラ・スパイダーと言う、蛇や蝙蝠などをモチーフにした素体を遥かに凌駕する、オリジナルの能力を得た存在を、彼らは目指している。
ましてや超進化体となれば、その力は全く計り知れない奇跡の力だ。
そして…
重加速
それは、ロイミュードが操る特殊フィールドと思えば良いだろう。
通称「どんより」と言われる、時間が止まるかのような世界は…シフトカーやシグナ

ルバイクと言う、同じかそれ以上の力でないと対抗できない、絶対的な、世界だった。
重加速の世界の中では、あらゆる存在がゆっくりと進む。
ロイミュードか、それに対抗できる存在でなければ、その世界で自由には動けず、
平たく言えば金縛りに合うような、そんな体験を否応なく味わうのだ。

そんな危険なものの反応があると知り、剛は焦る。
だが、それ以上に…進之介と呼ばれた、スーツ姿の男でありそのベルトの装着者たる泊進之介と言う男は、
闘志全開の目で言った。

「なんだって、ベルトさん!?今すぐに出撃しよう!」
『Ｇｏｏｄ!それでこそ!ならば今すぐ、仮面ライダードライブの出撃だ!』

進ノ介と呼ばれた男が、己のベルトを『ベルトさん』などと言って居るが、ふざけている訳ではない。
そのベルトには「クリム・シュタイン『ベルト』」と言う男の…ベルトのシステムの開発者の精神が、

データとして入っているのだ。
つまり、このベルトには、意志がある。
そして、その二人の男が交わり生まれる仮面ライダーこそが『ドライブ』である。
様々なシフトカーにより、ボディも、あるいは能力も、多種多様に変化する。
その対応力と進ノ介のガッツ、ベルトさんの知識が合わさることで、その力は無限大に進化する。
ロイミュードが人類の天敵ならば…仮面ライダードライブは、更にそのロイミュードの天敵、
人類の…最後の希望の1人なのだ。

「……って、活躍できたら良かったんですけどね、泊ちゃん、クリムちゃん」
そこに水をさした男がいた。
泊の上司でベルトさんの友人…そして、この秘密施設を当初から知っていた男、本願寺である。
彼は続けた。
「ぶっちゃけうちの管轄から離れすぎてて、ちょっとうちの部署がでしゃばったら、微妙に五月蝿いんだよ…」

コレにくってかかったのが、進ノ介である。
何でだよ、仮面ライダーは世間にようやく知られたんだ！派閥だの管轄だのって言ってる場合か！…と。
ベルトさんもそうである。
いくらキミの言い分でも、私は納得できないぞ！…と。

しかし、当の本願寺も、その二人の言葉は納得しており…そして、頭を抱えながら言った。
「その重加速反応があった街は、仮面ライダーが、既に居るんですよね…しかも2人も、だからわざわざ余所から要らないなんて言われたら、私もどうしたら良いのか…」

その言葉には、その場に居た者達全員、絶句するしか無かった。
…俺達以外に、仮面ライダーが居るのかよ、と。

結局。
本願寺の言うとおり、ドライブの出撃はしばらく見合わせる事になった。
クルーの開発者の1人の沢神りんなを筆頭に、現場からは不満だらけではあったが、

流石に上の決定ならばどうしようもない。
仮面ライダードライブは「刑事のライダー」、上層部の許可無く戦えないと言う不自由さもあるのだ。

その辺、俺は楽でいいや…
剛は、もう1人の「ライダー」は、1人ごちるのである。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そして、時は現在に戻して、風都。
フリーのカメラマンたる剛の武器、それはフットワークの軽さにあった。
情報収集能力だけならば、それはドライブ達にはかなわない。
警察と言う、数と権力の力は、それだけ大きいのだ。
だが…その分、初動はやっぱり遅い、それも事実だった。
だからこそ、剛は…音速より速く、ドライブ達には負けないように、とにかく足で情報をかき集める。
人に聞き、噂を頼りに、口コミをメモしながら、写真を取りながら。

そんな中で、剛は一つの噂を耳にする。
風都の裏路地で、怪しいスーツかタキシードみたいな姿の男たちが、夜な夜なたむろしては、誰かを…２０代ぐらいの男を、手当たり次第に襲撃していると。
…何故女の子じゃなくて、俺と同世代ぐらいのにーちゃん襲うのさ。
剛は、微妙に頭を抱えつつ、件の裏路地へとバイクを飛ばしているのだ。

そして、バイクを思い切り飛ばし、１５分もしない内に、剛はその場所へと到着した。
…果たして、その場所にはと言えば…

「…なんだありゃ？ロイミュード…か？」
そのタキシード姿の男は…２０人近くいる、それは…徒党を組まれたら異様の二文字だが、それは良い。
だが、その頭部には怪しい機械的な…平たく言えば、化け物がような、そんな人間離れしたモノが付いていた。
そして、彼らは、角材を持つものやナイフを取り出したもののもおり、剛へ敵意を向けていた。

剛は、そんな彼らの姿を見るに、なるほどと納得し…深呼吸すると、腰につけたベルトを彼らに見せつける。

「パーティーのお誘いは男からはノーサンキューでね…レッツ…変身！」

シグナルバイク…ライダー！と言う、やたらテンションの高い変身音と共に、剛は光に包まれる。

そこから現れた白亜の戦士…

「追跡…撲滅、いずれも、マッハ！」

車をモチーフとしたドライブとは対になる様に、バイクその物をモチーフとしたもう1人の「仮面ライダー」…

肩の後輪をモチーフにした巨大タイヤのエンブレムと、開閉可能なヘルメット風の頭部が爽やかな、正義の味方…

「仮面ライダァァ！マッ…ハァァァァ！」

仮面ライダーマッハ、これこそが詩島剛の戦士としての姿である。

マッハは…剛は、一瞬だけ、もう一つのライダーの姿へと変える…シグナルバイクにてシフトカーたるもう一つの相棒を見るが…こんな雑魚相手にリスクは要らないとば

かりに、通常のマッハの姿のまま、タキシードの集団へと突撃する。

「まずは、挨拶代わりだ!」

バイクの前輪のような銃、その名もズバリ「ゼンリンシューター」を構えつつ、剛は己の利用するシグナルバイクである一つを手に取ると、ベルトのバイクを差し替える。

シグナルバイク、シグナルコウカーン!カクサーン!

そんな音声が鳴り響いたと同時に、ゼンリンシューターからマシンガンのような弾丸の嵐が、そのタキシード集団へと襲いかかる。

狭い路地に集まっていただけに、それはもう、逃げる場所もない所に上から正面からと面白いように、弾幕の嵐で、タキシード集団は蜂の巣にされていく。

…なんだ、弱ぇなぁ…

剛は心の中でがっかりしつつ、とどめとばかりに、またシグナルコウカンする。

シグナルバイク、シグナルコウカン!トマーレ!

道路標識を止まれのサインのように、黄色く塗られた三角のオーラが、ゼンリンシューターから発射される。

そのオーラに触れたとたん…タキシード集団は一様に「固められた」。

そして…

シグナルバイク、シグナルコウカン！ライダー！ヒッサツ、フルスロットル！

シグナルバイクをもとの変身用のモノにもどして、自分のマッハドライバー…ベルトのバイクをぐいっと操作する。

するとどうだろう、バイクのマフラーを模したベルトからエナジーが燃え上がり、文字通り「マッハドライバー炎」となる。

そして、音声通りの『ヒッサツ』…エネルギーを纏った蹴りを敵にむけ、そのタキシード集団を爆散させる。

文字通り、完全勝利と言える、そんな一撃だった。

だが…剛は、ヘルメット状のゴーグルを上げて、エネルギーを排気しながら、訝しむようにあたりを見回した。

「人間じゃないよな……でも、コアが無い…やっぱりロイミュードでも無かったのか？」

小首を傾げて、彼らは何だったのかと言う答えが見えない疑問に頭を悩ます剛。

オツカーレ、剛のベルトの音声だけが、虚しく響いたのであった…。

第二話：仮面ライダーW

剛があの時、タキシード集団を爆散させた時…実は、剛は違和感を感じていた。
銃ではなく、素手で触った事で感じた事だ。
『芯が無い』、これである。
あるいは骨の無い肉でも、それこそ棒が無いアイスでも、感覚的にはそんな感じだ。
何だか、固まりきってないエネルギーそのものを破壊した、そんな感触を覚えていた。
あるいは…アレこそがロイミュードの能力なのでは無いのか、剛は一つの結論に達した。
ロイミュードの進化体は様々な能力を持っている。
最近だと超進化体もどきの風使いだって相手にした…擬似的な雑魚ロイミュードを召喚する能力だって、
よく考えてみたらあっておかしくないだろう。
剛は1人で結論付ける。
そうなると…俺1人だとキツいかもな。

そう、剛はぼやきつつ、進兄さんに早めに協力を求める事も考えている。
仮に公的な制約でドライブに変身出来ずとも、ドライブピットのクルーを経由し、例えばドライブの持つマックスフレア辺りの能力強化シフトカーの一つでも借りる等のサポートぐらいならしてくれるだろう。
りんなさん達も嫌とは言えないハズだし、むしろ快く応じるだろうから。
…もう1人の心あたりは、強さはともかく、剛にとっては素直に協力を求めるのはプライドが許せなかった。

そんな時、いきなり剛の背後から冷たいモノが首筋に当たる。
そして、この惨状はお前がやったのか、と冷たく聞かれる。
ふと、剛が落ち着いて良く見たら…なるほど、
ゴミ箱は散乱し、壁や道路は穴だらけ。
窓ガラスも割れている箇所があった。
そこに無傷でたって居る男…なるほどそう言う事か、と剛はため息をついた。

「あー、これをやったのは確かに俺だよ、銃を乱射せざるをえなくてな…正当防衛さ、20人近い紳士集団にエスコートされかけて…」

力無く、剛は説明すると、その銃を突き付けた者は、もう一つ質問した。
ガイアメモリ、特にスカルのメモリを知って居るか、と。

知らない、ガイア何とかって何だ？
剛はその質問に逆に問い返すと…その者は、銃を下ろし謝罪した。

「すまなかったな、俺は、強引にでも今回の事件の犯人をしりたかったのさ…そしたら、怪しいのが居てな…」
『だから先に言ったじゃないか、彼は君の同類だよ、と』

その者は、体が一つなのに、声の種類が2つだった。
これが…この街の…と、小さく呟いた後、剛は一言突っ込んだ。
「この街の仮面ライダーは、腹話術が趣味なのか？」
それに怒った、この仮面ライダーは…こう返した。
「腹話術じゃねぇよ！俺達は！」
『2人で1人の、仮面ライダーさ』

そう、この左右二色のツートンカラーのこのライダー。
左が青で右側が緑、マフラーたなびく二人で一つのこのライダー…
この街の守護神、それこそが…
仮面ライダーWであった。

「俺は、左翔太郎、半分側が…」
『僕は、フィリップと呼んでくれたまえ』
お、おう…と、狼狽えながら、剛は頷くしか無かった。
頭ではわかって居たが、右に左にと、文字通り真っ二つに割れながら、交互にこのライダーは話している。
まるでジキル博士とハイドと言うか、あしゅら男爵だよ。
話を聞いていると、正直、無駄に疲れるな…進兄さんのシフトトライドロンで色々慣れてなきゃもっと混乱してた気がするよ…
こんな事を思いながら、剛は、このライダーのファーストコンタクトで、少なからず疲弊していた。

だが、そんなたわいない事が頭から抜ける程、彼等は、重大な情報を教えてくれた。

「多分、あんたが戦ったのは『マスカレイド』、しかも、その残滓だな」
「マスカレイド…仮面舞踏会…か？」
『そう、それは園咲家が昔使っていた、量産型最下級のドーパント、だよ』
ドーパントとはなんぞや、剛の質問に対してダブルは答える。

かつて、園咲家は人間の進化の先をめざした。
ガイアインパクト…地球（ほし）の本棚と呼ばれるネットワークを軸に、秘密結社財団Ｘをも巻き込んだ…風都を巻き込んだ、一大計画があった。
そして、その園咲の人間が利用したアイテム、地球の記憶そのものを直結させたようなＵＳＢメモリ型のデバイス。
それこそが、ガイアメモリと言うものだった。

そのガイアメモリで進化した人間、それこそが…まるでドーピングを施した人間のような者に例え、ドーパントと呼ばれる存在であった。
それらは規格外の力が有り…仮面ライダーとしての力でもあるのだが…
とにかく、人の手に余る、超人…最早災害になるような、そんな存在でもあったのだ。

だが…マスカレイドは別である。
マスカレイドのメモリを使っても、他のドーパントとは違ってそこまで強大な力は手に入らない。
だが、「仮面舞踏会」の名に恥じない…複数人で一つのマスカレイドと言う特性があった。
そう、複数人同時に、その地球の記憶に突っ込んでもおかしくはない概念だったのだ。
それが故に、作りやすく量産しやすいメモリの一つとして流通しており…
その影響か、上級ドーパントに至っては、まるで手下のように、メモリ無しで召喚可能な有る種のドーパントの残滓としての降臨すら可能なドーパントであった。
最弱が故に、もっとも恐ろしい、そんなドーパントだった。

そんなことを聞かされた剛はWに言った。
「そんな…なら、急がねえと！俺が今そいつらをやったばかりだ！多分まだ近くに居るぜ、そのマスカレイドってのをどんどん産み出せる強いドーパントってのが！」
だが、そのWはまるで泰然とした口調で返したのだ。
「だから…俺がキーワードを集めて…」
『僕が検索するのさ……！ところで、彼は僕らの知らない事を知ってるみたいだ、翔太郎…

僕はそろそろおいとまかな』

「…まあ、お前に対人交渉は無理だよな…しょうがねえか」

そう言うと、Wは変身が解ける。

緑の…風の記憶のメモリが消滅し、1人の男が青い、銃の記憶のメモリを抜く。

そこには、二人で1人のはずなのに…まるで、80年代のドラマのような、ステレオタイプな探偵ルックの伊達男が立っているだけだった。

その伊達男は、己の帽子を弄りながら、こう言った。

「改めて、俺が、左翔太郎だ…フィリップは、ちょっと今検索をかけてくれている最中でな、まあよろしく頼むよ！」

検索とはそもそも何なのか、二人で1人なのに1人しか居ないの理由は何なのか。

剛は混乱しながらも、自分の正体を開かすことにした。

「あ、ああ…わかったよ左先輩！俺は…」

指をビシッと構える。

「追跡…撲滅…いずれも、マッハ！」

そして腕をぐるぐる回し、決めポーズを取った。

「仮面ライダー、マッハァ！詩島剛だ」

…おう、と、何か寒い物を見るような目で、翔太郎は唖然としていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

一方、同時刻。

（俺はどうしたら良いのだ…霧子、教えてくれ…）

（俺は、どうしたら良い…亜樹子、応えてくれ）

紫と赤の二人の無口な男が、風都で固まっていたのだ…。

第三話：追跡者

詩島剛が仮面ライダーWと邂逅する頃、ほぼ同時刻。
剛に遅れて、ある男が風都に到着した。

「これが、風都…」
重々しく口を開いたこの男。
メタリックパープルのライダースーツを纏い、漆黒のボディに髑髏が眩しい怪しくダークなバイクを引っさげている。
その瞳は非常に暗く、その表情は…受刑者にも死刑執行人にも思えるように、暗い。
ただ者ではない、その威圧感と異様さは、全身・全体から溢れている。
その男の名は、守護神…死神…仮面ライダー…
いずれも正解である。
だが、彼を呼ぶには、追跡…「チェイス」と言う言葉が、ふさわしかった。
かつては魔進チェイサーとしてドライブやマッハと幾度も戦い、更に以前のグローバ

ルフリーズと言うロイミュードの一斉蜂起の際には仮面ライダーとして人を守り抜いたこの男。
現在はと言うと、それらの枷と宿命を乗り越えた結果…フリーになっている。
そして、それが故に、ドライブが動けない時には頼りになる…そんな3人目の、仮面ライダーだった。
少なくとも、ドライブこと進ノ介と詩島霧子…剛の姉である、特状課の婦警にてドライブの頼れる仲間の1人には、そうであった。
「チェイス、済まないが俺達の分まで…」
「戦って…剛の力になってあげて」
そして、ライバルと守護対象たる霧子の言葉には…
「…なるほど、わかった…任せろ、霧子！」
子犬のように、素直に応えようとした。

だが、剛を追いかけて、チェイスははたと気が付く。
何をどうしたら俺は力を貸せるのだろう。
そもそも、俺はこの街の土地勘が無い。
地図の購入、そして剛の力になれそうな武器や差し入れは…俺は財布を持っていな

い。

どうしよう、チェイスの中で、その言葉がぐるぐると、風都に到着したとたん巡り出す。

そして、思いついた。

「…警察は、困った時に頼れる場所だ…悪いヤツも、居ない」

警察か交番を探そうと。

そして、００１やロイミュードに繋がっていた進ノ介の父親を殺したあの男はともかく…

チェイスは普段、特状課に世話になっていただけに、こんな感情を抱えていた。

そう思ってバイクを転がしていたら…警察署らしき建物を見つけた。

そして、そこには、赤いジャケットと赤いパンツが眩しい男が居た。

ちょうどいい…チェイスは話しかける事にした。

「…お前は、警察官なんだろ」

「いきなり失礼だな…何だ！」

少し怒ったように、赤づくめは答える。

…そうか、俺は今、失礼だったのか。

チェイスはそう思うと、謝り…そして『質問』しようとした。
して、しまった。
「…不躾で、済まない、なれてなくてな…それより、この街の道を聞きたいんだが…」
「俺に質問するなぁ！」
…どうしたら、良いのだ。
チェイスは涙を流せないハズなのに、泣きそうになっていた。

一方、赤づくめの方も困っていた。
赤づくめの男の名前は照井竜と言う。
その男は、かつては家族の復讐に燃えて復讐心にとらわれたが…仮面ライダーWと共に戦い、成長する中で、
負の心にも負けぬ正義の力と警察官としての本分、更に嫁さんもついでに手に入れた…仮面ライダーだった。
彼は、アクセル…仮面ライダーアクセルと言う、もう1人の「バイクのライダー」でもあった。
そして、無口でクールな外面とハードな格好で誤解されやすいが…本質的には熱血漢で誰より優しい。

家族を奪われた際の復讐心も、だからこそと言う裏返しと言う一面があった。
だが、チェイスの物言いに…向こうはまったく悪気は無かったのだが…イラつくぐらい、気の短い一面もあった。
そして、この男…質問されると、反射的に、質問するな！と返す悪癖があった。

とはいえ、頭が冷えた竜は、少しならず困っていた。
…なんかカタコトみたいで、もしかしたらこの目の前の男は外国人か何かかもしれないのに、自分は言い過ぎたかもしれない…と言うか、何故、あっちは俺の物言いに怒りもせず固まるばかりだ…なんなんだ、俺が悪い…まあ、悪癖のせいだから俺のせいなんだけど、なんで無表情なんだ…止めてくれ、何かだんだん申し訳ない気持ちになるだろ…
…大方、竜の思考はこんな感じであった。

お互いがお互い、自分の周りにいないタイプだったからか、どうしたら良いかわからない。
困った事に、無口同士な上に根がお互い気を使うタイプな為に、謝罪のタイミングがお互いつかめない。

心の中で、チェイスも竜も、自分の大事な女性に助けを求めていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

同時刻、裏路地、剛と翔太郎が居る場所にて。

「…って、ツッコミ不在過ぎるわ！なんだこの空間！」

「どうした剛、いきなり！」

「…俺じゃなくても言いたくなるだろ左先輩…」

亜空間から剛がいきなりツッコミつつ。

それはそうと、剛は自身の知る情報を翔太郎に話した。

自分達が戦っているロイミュードと言う機械生命体が居て、風都に潜んで居る可能性が高いと。

なるほど、と翔太郎はつぶやきながら、ポツリと漏らした。

…まるで鏡だな、と。

どう言うことか、と言う剛に対して、翔太郎は答えた。

「俺達が戦って…そして、俺達の力でもあるガイアメモリは、ざっくり言えば『人間が化け物の力を目指す』、そして、その…ロリコング？」
「…ゲンさんかよ、確かに話はあいそうだけどさぁ…ロイミュード、です」
「…そうそう、ロイミュードは、曲がりなりにも『人間になりたい化け物』みたい…だよな」
反射的に、剛はそれは違うと言いそうになる。
ロイミュードは、人に擬態しただけの…醜い怪物だ！と。
しかし、翔太郎は自分で言って、ふと気が付いたような表情をすると、クワガタ虫のような形のロボットを手から取り出す。
それは、ガラケーのような姿に変化するのを見届けると、翔太郎は剛を無視して電話を始めた。

『もしもし、翔太郎…良いデータは入ったかい？』
「そうだな、ロイミュード…いや、バイラルコア、で検索かけてくれ」
『はいはい、相変わらず翔太郎は人使いが荒いよね…じゃあ、検索を開始しよう』
…電話の相手、フィリップは、地球の本棚…この星のデータベースへと、トリップした。

第四話：地球の本棚

…相変わらずの人使いの荒さだよね。
フィリップ…本名、園咲来人（そのざき・らいと）は頭を抱える。
その中性的な、長髪の独特な雰囲気の少年は…何もせず、ある倉庫に立っている
それは、仮面ライダーWの秘密基地にて左翔太郎の仕事場。
リボルギャリーと言う、Wが利用する、移動要塞のメンテナンス施設であった。
そして、そこで陣取り、フィリップは…ただ目を瞑るだけである。
更に、一言だけ呟く。
…さあ、検索をはじめよう…

そして、まるで夢の中のような、精神世界がフィリップの前に現れる。
真っ白な世界の中で、本棚が文字通り、無限に宙を踊って居る。
それが…世界中で、唯一フィリップがアクセスできる地球そのものの記憶。
地球（ほし）の本棚である。

…さて、改めて、今まで集めた情報から始めよう。
その中に、いきなりフィリップの相棒たる男の、翔太郎の声がした。
ふぅ、とフィリップはため息をつき、その両手を広げる
そして…集中する、相棒の言葉へと。
…そうしないと、いろいろ目移りしそうだから。
ハラカンダ、ミラーワールド、シャルモン、面影堂…僕が知らない言葉がまだまだ無限に浮いてるよ。
フィリップは誰にもしられない様に…一言だけぼやいた。

…まずは改めて言う事じゃないが、『鳴海荘吉』。
ぶぉん、という音と共に本棚が一気に整理される。
すると、どうだろう…
地球の本棚から、その鳴海荘吉…自分達の恩人…彼の情報のみに絞られて、本棚が現れる。
…それでも、その情報は無限大である。
鳴海荘吉本人どころか、ちょっとでも彼が関わった、数々の事件や同級生の記録…
どこから地球の本棚がひっかけたのか、「よくわかるシンバルキックの世界」なんて本

すら見える。
何故だか、その本だけは、後で読みたいようなそうでないような…
フィリップはそんな感想になる。

…次は、『スカルメモリ』。
そして、その中で、因縁深いガイアメモリ。
骸骨・骨格・頭蓋骨…そんな地球の記憶のガイアメモリの記憶に更に絞られる。
フィリップと翔太郎にとっては、あまり思い出したくなく、そして…大事な記憶だ。

…最後に、『バイラルコア』。
ぶぉん！と良い音がして、フィリップの目の前に一冊の本が現れる。
…つまりこれか、とフィリップか1人ごちる。
そう、それこそが自分が、否…2人が求めたこたえ。
…記憶〜鳴海荘吉〜…
そう書かれた、一冊の本である。

「ふむ、これを翔太郎に伝えろと…」

その本を読み終えたフィリップは、そんなことをポツリと漏らした。
フィリップと言う男は、優しく知恵も回るが…尊大で空気は読めない。
それでも、翔太郎と言う自身の半身には、最大限彼なりに気を使っている。
ハードボイルドには程遠い、半熟温泉玉子野郎…ハーフボイルドな自分以上に情が深い、優しい男に…
これを伝えれば、彼は泣いてしまうかもしれない。
フィリップはそう考える。

…どうした！フィリップ！しっかりしろ、フィリップ！
でも、一時間ぐらいずっと無言を貫いただけで心配しだすこの男。
自分以上に…街を泣かすモノは許さない。
少なくとも、彼は、その信念の為なら…自分が傷付くことすら恐れない。
本当の優しさを持った、『仮面ライダー』だと、フィリップはおもっている。
ふぅ…と、フィリップがため息を吐くと、翔太郎に向けて言った。
「すまない、ちょっと興味深すぎて没頭しすぎたよ翔太郎…それより、剛君…だっけ？彼とも話が有る、すまないがスタッグフォンをスピーカーモードにしてくれ…」
そうして、地球の本棚すら出て現実世界に戻ったフィリップは、話をはじめた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

同時刻、裏路地。

『検索は完了したが…とりあえず翔太郎、そして剛君、大事な話がある』

フィリップの『検索』が一時間弱ぐらいして終了した後、フィリップは電話から、スピーカーを通して話を始める。

そして、開口一番、こう質問した。

『君たちにとって、事件の解決って何だい？』

いきなり、この人は何を言い出すのだ？

剛も翔太郎も、唖然とする…変な哲学書でも影響されたのか。

だが、その声は真剣そのものだった。

剛も翔太郎も、その質問に答えた。

「『敵をぶっ潰す！』俺にとって仮面ライダーはそうだ、姉ちゃんを泣かせて進兄さん達

真面目に生きてる奴を困らせる…そんなヤツは許さねぇ！だから、俺は敵をぶっ潰す事が解決だと思う」

剛がはじめに答える。

そして、次に翔太郎が言う。

「『街を泣かせない方法を考える』、俺達、仮面ライダーWはそう言うライダーで、それが俺達、鳴海探偵事務所のやり方…だろ？」

そんな2人の答えに、ふむと漏らしたフィリップは次の瞬間、こう答えた。

「まるで正反対に見えて、その実…君たちは心根は同じ、優しさと護るための意志から来ている…方法論が正反対になるのが実に興味深いね」

「フィリップ…お前こんな時に…」

「ああ、翔太郎…だったらね、この事件の簡単な解決策だけ先に教えよう」

一週間ぐらい、事務所にこもって…のんびりコーヒーでも啜れば良いよ。

そんなフィリップの答えに、剛も翔太郎も意味がわからず顔を見合わせた。

第五話：仮面ライダースカル

『…そうだね、剛君には、僕たちのそもそもの捜査のきっかけから話すべきだ』
フィリップの声がスピーカーモードのスタッグフォンから流れる。
そして、そのまま、長い話が始まった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

…6日前、風都…
ぶっふぉと、それはそれは芸術的なまでの水芸がごとく、翔太郎は自分の飲んでいるコーヒーを吹き出した。
フィリップは、汚いなとそれは冷めた目で見ながらも…心底驚いていた。
それは、1つ…依頼人が『所長』こと照井亜樹子…旧姓鳴海亜樹子、自分達の元所長の娘で自分の所長の依頼だった事。
もう1つ…翔太郎が浮気調査や単なる尾行調査があまり好きではない為ペット捜索

など安い依頼ばかり受けており、５０万と言うまとまった前金が翔太郎にとっては徳川埋蔵金のようにも思えた事。

だが、それ以上に、依頼の内容が、翔太郎とフィリップには衝撃的だった。

「お父さんが夜な夜な街を彷徨いて、街の人に暴力を振るっているらしいの!!みんなで止めないと!!」

なんだそりゃ、フィリップはそう思い…翔太郎は、それ以上に驚愕していたのだ。

鳴海荘吉、翔太郎の師匠でありフィリップの恩人。

そして…彼らを助けるために、風と共に逝った英雄…。

帽子とスーツと蹴りが似合う仮面ライダー、だった男の話なのだから。

亜樹子の話を簡単に纏めるとこうだった。

ある夜、とある女の子が家に帰る途中、偶然ある車を傷つけてしまう。

だが、それを目撃した持ち主のチンピラが…ふざけるなとばかりに、ナイフでその少女に切りかかる…その瞬間であった。

帽子をかぶった骸骨男が、その男を殴り飛ばし…部下らしきタキシード集団と共に、

その男を滅多うちにした。
それからと言うもの。
ここ数日、チンピラやヤクザもの、犯罪者といった裏路地にたむろする若者を中心に襲いかかる、骸骨男とタキシード集団の暴力集団が現れる。
そして…まるで、時が止まったかのような世界の中で、彼らは去っていくのだと。

「…でも、お父さんが、あの黒服…マスカット、だっけ?」
「それ、マスカレイドだよ」
「フィリップくん、それそれ!…じゃなくて、絶対ドーパントとつるんでるなんておかしいし…何より、スカルの力をこんな気軽に使うお父さんなんてお父さんじゃない!」

…彼女の言うとおりだ、翔太郎とフィリップは頷いた。
鳴海荘吉は、誇り高い男だ。
限界ギリギリまで追い込まれないと気軽に変身しない、そして『仕事』にガイアメモリは使わない。
それはかつて、鳴海荘吉が招いた友の暴走からの自戒…そして、愛する者との決別から来る誓いでもあった。

それを知っている…亜樹子は半分偶然の産物なのだが…全員の意見は一致していた。
きっと、ドーパントがスカル…仮面ライダースカルの姿を借りて、名を騙っていたに違いない、と。
そう、彼らはかつて、ダミードーパントと言う、全く同じ様な手段で悪さを繰り返していたスカルの偽物と戦った事があったのだ。
そして、ウォッチャマンやサンタちゃんやクイーン達と言った、情報屋からそう言った目撃証言をかき集め、そして3日後、つまりベルトさんが重加速反応を検知した、あの日に翔太郎はその鳴海荘吉を名乗る男に出会うことになった。

…3日前、風都、裏路地の一角…
「…くそっこの骸骨コスプレ野郎がっ！」
痩身長躯の男が、目の前の帽子をかぶった骸骨男を睨みつける。
その男は、学生をターゲットに違法薬物をばらまく小規模な売人集団、そのリーダーだった。
だが、手下にて友人だった者達が次々と、いずこかから現れたタキシード集団に殴り飛ばされる。

大勢は、決した。
だが…その男は諦めなかった。
「…俺の力を、みやがれ！」
アノマロカリス！そう叫ぶガイアメモリを生体コネクタに挿入する。
するとどうだろう…その男は、その通り、かつて絶滅したと言われたアノマロカリスを模した化け物へ変化する。
それは、かつてばらまかれたガイアメモリの、ある種の生き残りだった。

だが…骸骨男は、平然と銃を構えて、こう言った。
「…1つ、お前は子供を狙って傷つけた…1つ、その罪の重さを気付かない…1つ、力に酔って勝てない敵に挑む…」
何をペラペラと、と、その化け物はうめき襲いかかろうとしたが…
「貴様は、罪を数える資格すら、無い」
そう言った後、アノマロカリスドーパントの攻撃より早く、その銃に蜂の巣にされてその表皮ごとガリガリと砕かれてしまい、近づいた骸骨男がとどめとばかりに腹を蹴る。
そのダメージに耐えられず、アノマロカリスのガイアメモリは粉々に砕かれ、その男

は気絶した。
骸骨男は、その男を踏みつけると、その銃を男の頭に銃口を突きつけるような形で当てる。
そして、つぶやいた。
「貴様は、街の為に…消す！」

その、瞬間であった。
「止めろぉぉ！」
「何…!?」
その、処刑が始まる直前、止めに入ったものが居た。
緑と黒の戦士、仮面ライダーW、サイクロンジョーカーであった。
後ろには、Wに『入って』気絶したフィリップと、彼を抱える亜樹子も居た。

そして…その骸骨男、いや、仮面ライダースカルはその姿を見て…戦意を解いた。
そして、嬉しそうに、変身を解除した。

…翔太郎、お前はまだまだ甘いが、帽子が似合いだしたじゃないか

…フィリップ、俺の付けた名前を大事にしてくれてありがとう
…そして今更だけど、ちゃんと結婚する姿を見れなくて、ごめん亜樹子

そう、嬉しそうに、言っていた。
まるで、先ほどまでの処刑人の姿とはまるで違った、普通の父親の姿であった。

頭では、皆わかっている…この『鳴海荘吉』が偽物なのだ、と。
だが、W達は…その男が偽物には、一瞬、思えなくなった。
その刹那…『鳴海荘吉』は、亜樹子に手を伸ばす。
しまった…！そうWが思った瞬間、しかしその『鳴海荘吉』は…
彼女の頭を撫でる、それだけだった。

…俺は、やっと、やっと触れた…親父らしい事を、何一つ、できなくて、すまない…
彼は、泣いていた。
誰にも涙を見せたことが無い男が、泣いていた。
風都の為に、全てを失った男が泣いていた。
気が付けば、亜樹子も翔太郎も、フィリップすらも泣いていた…。

そして、情けない姿を見せたな…と謝罪すると、『鳴海荘吉』は悲しい顔をした。
ああ、俺は「違う」と、わかったか、と。
そうだ…本物の鳴海荘吉は…亜希子に触れる事が出来ない、「呪い」を受けている。
愛する者に触ると…爆死する筈だった。

…だから、そうだな。
その右手をかざすと、全ての時間が止まったかのような、そんな世界を巻き起こす『鳴海荘吉』は…闇の中へと消えていきながら、こう言った。
…俺を止めたければ、早くしろ、と。
後には、慌ててその姿を追いかけようとする亜希子と…無言で立ち尽くす翔太郎とフィリップ。
そして、『鳴海荘吉』が倒したであろう…気絶した外道どもが転がっているだけだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

『…そして、僕らは、その偽物の鳴海荘吉を追っかけて、翔太郎が手当たり次第に色々探していたのさ』

なるほど、と、剛は納得した。
恐らくはその正体はロイミュードなのだろう。
そして、本物の鳴海荘吉を…コピーしたのだ。
その父親らしい慈愛も嘘っぱちだ、剛は心の中で吐き捨てる。
きっと、コピー元の感情…未練を元に、超進化したいだけなのだろう。
親子愛すら、師弟愛すら利用するなんて…まして、こんな純粋な人たちの思いを踏みにじるなんて…
この場に進兄さんが居なくて良かったかもしれない、きっと、俺以上に怒りに震えるだろうから。
剛はそう思っていた。
…だが、フィリップの口から開いた言葉は、剛の予想の範疇を、超えていた。

『あの鳴海荘吉は…本物なんだ翔太郎！偽物だからこそ、完全な本物の鳴海荘吉なんだよ！』

実に矛盾する言葉。

だが、フィリップの口から語られた真実は、皮肉にもそれを証明しているのだった…。

第六話：失敗作

「ハート様、申し訳有りません！」

まるでバレリーナや中世の姫を彷彿とさせる…いわゆる、黒ゴスと言えば良いだろうか。

そんな、ふわふわとした華美な漆黒の衣装を身に纏った女の子が居る。

彼女の名前はメディック。

その「医療」と言う名前の通り、ロイミュードを癒す力を持った…死の天使、だった。

そんな彼女の氷の微笑みに救われるロイミュードは少なくないが…

破壊され未来が無くなるロイミュードも、また少なくなかった。

そんな、鉄の女が…顔をぐしゃぐしゃにして泣いている。

それを、面白そうな表情で見ている男も居た。

「メディック、貴女らしくない…いやぁ、ハートの役に立たぬ穀潰しって意味だと、実に貴女らしい…ハートには悪いが、愉快で痛快で笑える光景だ」

そんな、昔の昼ドラみたいなねっとり嫌みを送る緑色の服の眼鏡の男、彼はブレンと言った。
その「脳みそ」と言う名前よろしく、頭はメディック以上に良い。
そして、それ以上にハートには高い忠誠心がある。
だが、彼風に彼を評価するならば…
「…うるさい！」
「ぬわぁ！私をコアに戻さないでぇ！」
…短慮で、嫌みで、小物臭い兄ちゃんでしかない。

そんな彼らを呆れた視線で眺める、紅いスーツを来た長身の違丈夫が居た。
彼こそがハート。
心臓と言う意味の名前の…平たく言えば、罪な男だった。
理性的で、優しく、そして一本気な性格のハート。
その実力と、それ以上の包容力は、メディックやブレンから無償の愛を受けるほどの器で有った。
そして、例えば、かつての冷酷非情な男…００１すら、無条件で認めるほど、彼はロ

イミュードの王としての風格を身につけ始めていた。
彼は、そう…本来は上下関係の無いはずの…ロイミュードの長でありグローバルフリーズなど多くの事件での首謀者でありリーダーだった。

とは言っても、それこそ、毎日のように部下同士が喧嘩しているのを見るのは、鷹揚なハートからしたらでもウンザリする訳で。
肩を少しだけハートは落とすと、諌めるように言った。

「メディックも顔を上げて…ブレンも、仲間に言いすぎだ!」
ハートの言葉に顔をパッと笑顔にさせるメディックと、それとは対照的にいつの間にかロイミュードのコアから復活したブレンはハートに罰の悪そうな顔をする。
そして、その後、こう続けた。
「メディックは失敗しちゃったけど…１０８人しか俺の友達が居ないのに、１０９人目…いや、うまく行けば１０００人だって１００００人だって友達が増えるような、素敵な話なんだ…ちょっと怪我したぐらいで、俺は怒らないよ」

そう、骸骨男…スカルに吹き飛ばされてようやく立ち直れたロイミュード３人は、あ

る程度復活するために一週間近くアジトで静養するしかなかった。
そして一週間後の…つまり、剛とW…ついでにチェイスと竜が邂逅した丁度、今日。
ハートは昏睡から目を覚ましたのだ。
特に、あの時…スカルが3人にトドメを差そうとしたあの時。
スカルのマキシマムドライブから、味方のブレンとメディックをかばって、ハートは彼等の盾になった。
コアこそ破壊されなかったものの…長い長い昏睡状態になるほど、深いダメージを受けていた。
そして、その深いダメージは…元を正せば、全てメディックのものだった。
ごめんなさいごめんなさいと、顔をあげろと言われても泣き伏せる件の下手人メディックを…
ハートは優しく抱き留め、そして、更に諭すようにこう続けた。

「君が気に病むのはわかる、だが、過ぎたことは仕方ない…それより、メディックやブレン、君たちを失わなくて良かったよ」
「…は、ハート様……ありがとうございます！でも、全部私が悪いんです……あんな軽率な実験を、あんな失敗作でやるから！」

ハートは、仮にも友達になれるかもしれなかった物を失敗作って言うなよと、少し悲しい顔をする。
そんな光景を、ブレンはハンカチを噛みしめながら、見ていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

同時刻、風都の裏路地

『…結論から先に言おう、あの鳴海荘吉は1週間もしたら自壊する』
フィリップはこう前置きして、続けた。
曰わく、こういう事なのだ。
通常のロイミュード達は、バット・コブラ・スパイダーの素体から誕生する。
そして…進化する度に、仮面ライダー以上の進化と超能力を手に入れる。
だが、進化に届かない者も、やはり少なくなかった。
だが、最初から進化体クラスのエネルギーが有りそうなバイラルコア…ロイミュード

のコアの素体以上のエネルギー体が有ればどうだろう。
そこに目をつけたのが…偶然、メディックが拾った、ビギンズナイトがあったあの場所にたまたま立ち寄った際、海岸に打ち上げられたスカルのガイアメモリだったのだ。
彼女はこの小さな棒から、不思議な力を感じた。
恐らく、自分たちロイミュードに匹敵する力を。
それは、うまく使えば、きっと大好きなハート様の新たな力になるだろう…メディックはそう結論付けた。
だが、バイラルコアの代用にいきなりハートを巻き込む訳には行かない。
ブレンでいいや…とは思うが、失敗して死んだら…恐らくハートが悲しむ、それはメディックにとって何より嫌だった。
そこで、彼女は…ふと気が付いた。
ああ、『X』ならば丁度良い、あれならうまく使えそうだ…と。
『彼女、メディックだったかな?それがXと名付けた存在、それは、言わばロイミュードが生み出そうとしたロイミュード…ナンバーが無い、文字通りのXナンバーだった』
フィリップが少し解説を挟みながら、話を続けた。

その『X』は、そう…とても良くできた、人形だった。
会話能力も、戦闘能力も、ロイミュードに欲しい最低限の力はある。
しかし…感情を持つことは、ついに、なかった。
ハート達は、ゆっくりその友達…あるいは、ハートにとっては娘や息子のような存在のそれを眠らせてやろう…そう思い封印したが、『人形』であった事に、メディックは目を付けた。
かつての魔進チェイサーやハートが搭載した超重加速の実験の素体として、バイラルコアを密かに使いメディックは実験台として利用していたのだ。
そして、反乱などの心配が無い、つまり意志がない事に油断したメディックは、スカルのガイアメモリに『X』のデータを差し込んだ。
だが、それはメディックの想定の外の事態を引き起こした。
それが『鳴海荘吉』の召喚、そして暴走であったのだ。

余談だが。
ハートに『X』を利用した事がバレたメディックは、それはそれはこっぴどくハートに叱られたと言う。

ハートは一度も手をあげず、こんこんと、ただメディックは叱られた。
…逆に堪えるわよ、ハート様。
メディックは内心思いながら、お説教を涙目で正座して聞いていたと言う。
そして、何故か、ハートの説教なら私もちょっとうけたいと、若干ウザくてキモくてホモの顔をしたブレンが居たとか居なかったとか。

…本題。
そして、フィリップは最後にこうしめた。
『そのX…ロイミュードと言うより、むしろガイアメモリが本体だから…仮にスカルドーパント、としよう…スカルドーパントは、本来有り得ない力のオーバーロードで並のドーパントやロイミュードの能力を遥かに凌駕するパワーを持っているが…身体が堪えられないだろうね、例えばバイクに飛行機のジェットエンジンを無理やりくっつけてるような話だ、遠からず自壊する』
なるほど、コーヒーでも〜ってセリフは、そのタイムリミットが一週間以内なのかと、剛は思い納得するが…
次のフィリップの言葉に、思わず、そんなわけないと絶叫したのだ。

『…しかし、そのスカルドーパントの魂は、Ｘが鳴海荘吉をコピーしたと言うものではない…仮面ライダースカル、その魂として一緒に鳴海荘吉と共に戦い抜いたスカルのガイアメモリそのものの記憶と経験なんだよ、Ｘに意志は無いからね…だから、鳴海荘吉じゃなくても…彼は紛れもない仮面ライダースカル、そのものなんだ！』

第七話：集結

「フィリップさん…って言ったか、あんた、いい加減にしろよ！」

フィリップの長い長い話が終わると、最初に噛みついたのは剛だった。
彼の手は、怒りにぶるぶると震えており、その瞳もつりあがっている。
剛は、その怒りをフィリップにぶつけた。
「何が魂が刻まれたガイアメモリだ、もう1人の『仮面ライダースカル』だ…いい加減にしろよ！適当なこと言って戦意を鈍らせたいのかよ！あんた一体…左さんの何なんだ！」
剛の怒り…それは、翔太郎の事を想えばこそだった。
信じがたい話の連続によるショック。
そして、翔太郎にとって大事な男の復活。
それらは、翔太郎にとっては戦意を鈍らせて苦しませるだけではないのかと。
剛と言う男の本質は、単純に…翔太郎の様に優しいお人好しでもあった。

だが、フィリップは、泰然と返した。
…君に翔太郎の何がわかる、と。
そのまま、フィリップは剛の怒りに答えた。
「翔太郎は、例え僕が犯罪者になっても…苦しんで、悲しんで、それでもその犯罪を止めにいくだろうね…それこそが、柔らかいからこそ、誰からも愛される『ハーフボイルド』左翔太郎と言う男だ…仮に、誰が相手だろうとその信念はまげない、ならば僕は翔太郎の信念には答え続けたい」

嘘は…翔太郎に絶対に僕はつかない。

凛と通る声で、宣言した。
剛は、その声に、圧倒されていた…。

それから、ふいに、翔太郎が口を開いた。
…あのおやっさんは、やっぱり俺たちの知っているおやっさんなのか、と。
フィリップは、君にとってはきっとそうだ、と優しく答える。
…あのおやっさんは、何が目的で犯罪者狩りをしているんだ

翔太郎の次の疑問に、それを知るにはキーワードが足りない、とフィリップは冷たく突き放す。

…あのおやっさんを、救う手立ては無いのか

翔太郎の絞り出すかのような叫びに、恐らくそれは無理だろうし生き残らせる手立てがあっても用意できない、と悲しくフィリップが言う。

…あのおやっさんは、倒すべきなのか

翔太郎の最後の疑問に、フィリップは、君に任せると返した。

僕以上に『鳴海荘吉』を知っている君に任せる、と。

そして、フィリップはこう付け加えた。

『僕個人としてはね、あの鳴海荘吉と君が戦うのは見たくない…なんならファングを使って戦え、と命令しても僕はしたがうよ、君とその師匠の帽子の絆は、僕の思う以上に深いから…決断しようか、ほっといて自壊するのを待つか、僕をメインに戦わせるか、それとも君が戦うか、だ』

残酷な事言いやがる、剛は内心吐き捨てる。

だが…誰かが、絶対に言わないといけない話だ。

…残酷な事を、相棒に言わせやがる、そう剛は付け加えた。

だが、翔太郎の出した答えは…いずれでもなかった。

「…俺には、どの選択肢を選ぶ事もできないよ、フィリップ」

『翔太郎、キミは…』

「だって、俺たちは2人で1人、俺だけで先走って決断して…失敗するのは、もう嫌だ…だから、2人で逢いに行こうぜ！そのおやっさんにさ、それから決めよう！」

『…わかった、それは、きっと君と僕の、極限…の選択なんだね』

2人でその『鳴海荘吉』に会って決着を付ける。

コレが、翔太郎の出した選択だった。

…恐らく、最も己が傷つく選択肢だろうな、と剛は思う。

だが、恐らく最も己が納得する選択肢だろうとも、剛は感じた。

そして、それを受け入れるフィリップが、かっこよく見えた。

…進兄さんとベルトさんもきっとこんな感じだろうな、と剛は小さく笑い、

自分のベルトが、少しだけ寂しく思えた。

そんなおり、調子外れな女の声と、やたら渋い男の声が、その場に響き渡る。

「チェイスくん…ここよ、翔太郎やフィリップくんがいる場所は！」
「…ありがとう、いつか、礼はちゃんとする」
その声は、Wとマッハと言う、２人の仮面ライダーの天敵のものだった。
「亜樹子…!?なんだそのまっ紫な男は!?」
「チェイス、おまえその女は誰だ!?」
亜樹子とチェイス、それぞれ、あらゆる意味で苦手ながら…それ以上に最も信頼している相手でもあった。
「俺に…質問するなぁぁぁぁぁぁ！」
「いや、お前にしてねえよ！」
「そもそもアンタ誰だよ！」
後、ついでに何か竜も混じっていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

実は、チェイスと竜がにらめっこして暫く経ったころ。
竜の新妻たる亜樹子は竜の職場に弁当を持って行こうと警察署に着ていた。
そしたら、玄関先で何か怖そうな男に夫が睨まれている。

事件なのかと身構えていた亜樹子なのだが…何か様子がおかしい。
２人とも、なんか冷や汗だらだら流してないか、コレ…と。
意を決した亜樹子は、その男に質問した。
何やってるの、と。

「…俺は、警察署の人間に、道を聞こうとした…だが、ダメだった…この街では、警察に質問したらいけないらしい…」
「んな訳あるか！」
どこから取り出したのか、「難波の美少女仮面」とかかれた便所スリッパでチェイスをはたく。
そして、夫は、更に容赦なくしばかれていた。
「何やってるの！竜くん、本当に何やってるのよ！」
「いや、すまん、本当にすまん！」

それから。
亜樹子のフォローにより、チェイスの誤解が解けたところで、チェイスは己の目的を伝える。

すると、竜は意を決したように話した。
…恐らく、その男がお前の思う様な有能な人物なら、きっと左に逢っているハズだ。
俺も「仮面ライダー」なんだ、付いてくるか、と竜に言われたチェイスは、亜樹子と３人で剛と翔太郎の居場所へと急行したのだった…。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「…何、チェイスに頼んでるんだよ、姉ちゃん…」
剛は天を仰いで、額へ手を乗せる。
…姉ちゃんがチェイス好きなのは知ってるけど、俺があいつ苦手なのも知ってる癖にそんな感想で剛の頭はいっぱいであった。
…そんな、集結した仮面ライダーたちを、物陰から骸骨が覗いていた…

第八話：スカルドーパント

路地裏の物陰から、仮面ライダーが集まる姿を確認する…最後の仮面ライダーがいた。

仮面ライダースカル、件の事件の渦中にいる男だった…。

…全部ばれて、しまったな。

その仮面ライダースカル…否、フィリップの言うところなら『スカルドーパント』。

彼は自嘲するように呟いた。

…『俺』は鳴海荘吉、そう思いたい

ぽつりと、誰にも聞こえない程度の声で、それを続ける。

…だが、本当の『俺』はもうどこにも居なくて、俺は本物の残滓なんだろう

…だから、自分で自分を止められない、本能のままでしか動けない、獣だ

…もっと上手く、もう1人の俺は出来るだろう

…だが、この俺は、自分が街を泣かせる『悪』だと想えば殴るのを止められない

…愛するものを見れば、地球の記憶を覗き見してでも笑ってくれと素直に言ってしま

う

…これじゃあまるで、翔太郎だなぁ…

…それと、剛だったか、彼には悪いことをした、銃を持って路地裏に来るからてっきりな…

最後に…口元が有るのなら、きっと薄くつりたげただろうスカルドーパントは最後に言った。

『これ』が、『俺達』仮面ライダースカルの、最期の戦いかもな…」

小鳥のようなガイアメモリが宙を舞うのを見届けて、スカルドーパントは仮面ライダーたちの前へと、

その姿を現そうとした。

＝＝＝

自分たちが追いかけている『鳴海荘吉』は、決して偽物ではないと。

剛はフォローするように、あれはあれで偽物でしかない…と、言っているが、自分でも薄ら寒いフォローだとは剛は感じていた。

例えば…剛にとっては、霧子だ。

彼女がもしも居なくなって、代わりに姿が全く同じ『霧子』が現れたとする。

それはそれは、剛は反発するハズだ、お前なんか姉ちゃんじゃない！と。

しかし、その偽物が本物と同じ記憶を持っているのならどうだろう。

更に言えば、大事な遺品や宝物から、だとしたら。

それは…本物以上に、本物なのだろう。

時間とは、記憶により繋がるものだ。

逆も、また然りだ。

剛も、本当なら、件の事件の張本人…その鳴海荘吉の娘に向かって言いたく等なかったが、

しかし黙ってしまうのは、もっと失礼な気がした。

フィリップが、真っ直ぐに翔太郎に向き合い、そして真っ直ぐ自分にぶつかった姿を

見て、
もしかしたらそう…剛は思ったのかも知れない。
さて。
亜樹子は、翔太郎と剛に散々質問した。
己の『父親』を救う手立ては無いのか、そんな、まるでセミのように短い命を…悪人相手にばかりしかぶつけられないのか、と。
しかし、剛はもちろん…翔太郎はもっと、亜樹子に向かって「黙れ、俺が一番思ってるんだ！」と叫びたかっただろう。
だが、それは『仮面ライダー』として許されない…叫びだった。
…だから、彼らは黙ってその質問にはうなだれるばかりだった。
最後は見かねて竜が亜樹子を抑えに行くが、その表情は非常につらそうなものだった。
家族を非常に大事にする竜、しかも本来ならば義父にあたる男の話なのだから。
そんな様子を、チェイスはただ1人黙って見ていた。
いつか、『家族』の苦しみに、チェイスは困惑したことがある。

…彼には、家族は居ないのだから、それも赤ん坊のような情緒しかないのだから。
そう、チェイスは人間ではない…チェイスは０００と言う、プロトタイプのロイミュードだった。
だからか、人間の人間らしい在り方をまだ、チェイスは知らない。
自覚していないだけの節はあるが、知識も少ない所が有った。
「…人間は、血が繋がらないのに、家族になれて、父親になれるのか」
…チェイスはまた一つ、かしこくなった。

そんなおり、甲高い鳥のような鳴き声が聞こえた。
Ｘ型の鳥のような…ガイアメモリ、だった。
それは『エクストリームメモリ』、地球そのものと直結する、究極のガイアメモリ。
仮面ライダーＷの究極にして…最後の嵐を呼ぶ、切り札。
そして…

「前から思った事だが…僕はタクシーやバスに一生乗らなくても生きていけるよね」
地球の本棚、そのデータベースに直結出来るフィリップにとっては、貴重な移動手段だった。

そんな、悲壮感をぶっ壊すマイペースな登場に、亜樹子や翔太郎や剛はおろか竜すらひっくり返るが、
フィリップは構わずにチェイスに目配せし、言った。
…君は、気付いているんだろう？とっくに、『鳴海荘吉』がこの場に来てることに、と。

ざわざわ、と…周囲が騒がしくなる中で、チェイスはぽつりと答える。
「…何故なら、誰も、聞かなかったからだ！」
…フィリップ以外の全員が、ひっくり返った。
フィリップだけは、確かに…と、納得していた。

そんなおり、いきなり現れたのは『鳴海荘吉』、だった。
「言われなくても、みんな揃ったら出て行くつもりだったぜ…」
そんなことを言いながら、こつこつと、彼は歩を進める。
「良い後輩が出来たな翔太郎…最後の授業だ…変身…いや、違うか…」
その鳴海荘吉は…皮膚がボロボロと崩れるように、仮面ライダースカルの姿へと変化した。
…そうだ、この鳴海荘吉の正体はスカルのガイアメモリそのものだ。

『仮面ライダースカル』が彼の本来の正体、鳴海荘吉の姿は…『X』の力の副産物による、姿のコピーだった。

「…フィリップ、俺へと名付け返してくれてありがとう…俺の名前は…」

スカルドーパント、そう言って、自身の銃であるスカルマグナムを銃口を水平に構えた。

第九話・最期の『S』／骸骨（スカル）と罪（シン）の『S』

…どうした、何故構えない。
スカルドーパントを名乗る、もう1人の『仮面ライダースカル』は、銃を構えながら聞く。
その言葉には、怒気は感じられない…馬鹿にした口調ですらない。
まるで、子供にキャッチボールを教えるかのような、そんな口調だ。
だが、問われた側と仮面ライダー達は、一様に動かない。

その内、代わりに翔太郎が聞く、何故今まであんな物騒な真似をした、と。
スカルドーパントは、真っ直ぐに答える。
俺は、街を泣かせそうなヤツをみたら、『鳴海荘吉』と違い我慢ができないから、戦う、と。
そして、剛には勘違いで襲ってしまい悪かった、と、付け加えた。
フィリップは聞く、あなたの時間は限られている、なら静養したら長生き出来るかも

しれない…その内に地球の本棚とエクストリームを使えば、もしかしたらもしかするかもしれない、と。

スカルドーパントは優しく答える。

お前は優しいな、でも、自分でわかる…きっと、明日にでも俺は俺で無くなる。

ならば反面教師の姿を見せて、翔太郎を師匠離れさせる…『卒業式』ぐらいさせたかった、と。

竜は一言だけ、呟いた。

何も、貴方に送れない息子ですまない、と。

スカルドーパントは困ったような口調で返す。

『俺』に返すな、もう1人の方の俺の墓に旨い酒でも供えてとっとと孫の顔みせやがれ、と。

剛は、唸るような口調で聞く。

お前は『ロイミュード』か、『ドーパント』か、それとも…『仮面ライダー』なのか、と。

スカルドーパントは笑って答える。

全部だ、「スカルドーパント」はフィリップがくれたのが嬉しくて名乗ってみただけだ、と。

そして、弟子の友人のくれた名前だ、シンプルで良いだろう…と、自慢気に呟く。

そして、最後にチェイスが聞いた。

お前は神様にでもなったつもりか、と。

「…神様、『俺』が嫌いな概念で、もう1人の『俺』は亜樹子が産まれるときにしか祈った事も信じた事もない存在だ！」

スカルドーパントはチェイスの疑問に激昂したが、チェイスは怯まず続けた。

「…怒らせて、すまない…ただ、わからなかった…お前は『罪を数えろ』と言う、不思議な話だ、裁判官じゃない癖にお前の為に罪を数えて…それが何になる?…もしかして、昔の俺のように、死神でも気取って居るのでは無いのかと、俺は思ったんだ」

…そう、チェイスはとても純粋な男で有った。

だからこその真っ直ぐな疑問、お前の決め台詞、それは何を思い言っているのか、と。

そして、その言葉を受け継いだ翔太郎が横でうろたえる中…スカルドーパントは怒気を納めると、

わかりにくい決め台詞だったよな…すまない、と、前置きして話した。

「…それが、『正義』の、重さだ」

「…正義」

「そう、己の罪の数を数えて、自分の臆面のなさを再確認する…そして、相手の罪を数えて『ああはなるまい』と己を恥じる…そうすれば、己の拳に街を守るぐらいに強くて堅い…言うなれば『重さ』が生まれるのさ」

それこそが、「罪を数える」。

スカルドーパントの語る、正義の重さ…仮面ライダーとしての、誓いの言葉だった。

誰もが思った。

この男は…本当に、『鳴海荘吉』なのだ、と。

少なくとも、『仮面ライダースカル』を、真っ直ぐに受け継いだ者だ、と。

そして…怪物にも外道にも、誰も思えなくなった。

ふいに、チェイスが話し出した。

「…俺は、俺の罪が有るのなら、それは…お前と同じ、許されない命なのに、俺はお前とは違って周りに救われてばかりだ…一朝一夕で、返せないぐらいに…死神の時ですら、皆に…きっと救われていたのだ、だが俺は、壊してばかりだ…全てに、俺の疑問に答えてくれた、お前にさえ『恩をまだ返してない』」

次に、竜が言った。

「…俺はあんたから、少なくともう1人のあんたから二度も奪おうとしている…父から娘を奪って、そして今…俺の意志で娘から父を奪おうとしている、『不出来な娘婿だ』」

フィリップも語り出した。

「元をただせば貴方のせいでもないこの事件、翔太郎を巻き込まないように誘導する方法もいくらでも有った…少なくとも、辛い選択肢を与える真似をする必要性は、なかった…『僕ばかり、相棒に痛みを与えてしまった』」

翔太郎が、力無く言った。

「あんたに追い付きたくて、格好も嗜好も…決め台詞すら真似して、今まで突っ走ってきた！でも…俺は、本当の意味で、『罪を数えてなかった』…」

そして、剛が、自嘲するように言った。

『俺は、嘘つきだ』…俺が、追跡も撲滅も…本当にマッハでこなしていたら、こんな哀しい話に、こんな優しいヤツらを巻き込む事はなかった…もっともっと、俺は強くなきゃ、いけないんだ…」

そして、５人は力無くうなだれて…気合いを入れ直すように、右手を固める。

…そして、フィリップ以外の４人が己の腰にベルトを巻く。

そして、一斉に、叫んだ。

「俺は…俺たちは…『俺たちの罪を数えた』……さあ、お前の罪を…数えろ！」

スカルドーパントに、その右手で一斉に指を指しながら。

言われたスカルドーパントは…どこか、嬉しそうだった。

最終話：剛はその姿を乗り越えられるのか？

…いい、面構えだ。
スカルドーパントは、５人の戦士を見て、心底嬉しかった。
『仮面ライダー』が、立派に育ってくれた、と。
そして、ああ、コレでやっと、安心して逝ける、と。

「…行くぜ、フィリップ！」
「ああ、翔太郎…コレが、僕達の本気だ！」
フィリップがエクストリームメモリに吸収されて、そのままエクストリームメモリがベルト…Ｗドライバーに刺さる。
エクストリィィム！と、唸り現れた…緑と黒にシルバーのラインが入ったライダー。
仮面ライダーＷサイクロンジョーカーエクストリームである。
「さあ、振り切るぜ…変ッ…身！」
竜のベルト、アクセルドライバーに竜はアクセルメモリを差す。

赤いオーラが周囲を巻き込み、アクセルッ!と言う音声から現れたのは紅いライダー。
仮面ライダーアクセルである。

「…変身」
シンプルに右手を水平に構えつつ、もう一つのマッハドライバー炎にシグナルチェイサーを差し込む。
シグナルバイク、チェイサー!と言う変身音と共に表れた、白亜のボディに紫のラインの入った、ライダースーツのようなライダー。
仮面ライダーチェイサーである。

「おりゃぁぁ!行くぜ、変身!!」
そして、剛が自身のマッハドライバーにもう一つの相棒を挿入する。
シグナルバイクにしてシフトカーたる矛盾する相棒、かつてのハートの力を想定して生まれた剛の最強兵力。
その姿は、仮面ライダードライブと仮面ライダーマッハをくっつけて割ったような赤と白が眩しい騎士。

己にダメージが跳ね返って来ても気にせぬリスク全開の『命がけ』…それこそが…
シグナルバイク、シフトカー！ライダー！デッドヒート！
仮面ライダーマッハデッドヒートである。

…凄いな
スカルドーパントは、呟いた。
きっと、皆『仮面ライダースカル』なんて片手で捻る程の戦士なんだ…スカルドーパントは思った。
…だが、俺も簡単に負けてやる訳にはいかないな、こっちは『俺』と『もう一つの俺』と、ついでに『失敗作』の3人がかりだ。
そう、スカルドーパントは密かに心に思いながら。

そして、スカルドーパントはスカルマグナムから、強大な重加速度の世界を発動させる。
かつての魔進チェイサーやハートが手に入れた絶対の世界。
自分だけが動ける、時が静止した世界。
紫電に囲まれた、無敵のフィールド。

メディックが生みだした、ロイミュード最強の力の一つである。
その力に巻き込まれた…一般人の亜樹子はもちろん、仮面ライダー達ですら、全く身動きが取れなくなる。
スカルメモリの意志を借りた『X』の、本気である。

…だが…

「しゃら……くせえぇえぇえぇえぇえ!」
剛は、自分のベルトを4回高速でたたき付ける。
バースト!キュウニ、デッドヒート!
そんな音声に合わせて、デッドヒートマッハから真っ赤なエナジーが溢れ出し、そのフィールドを吹き飛ばす。
それこそが…デッドヒート、命がけの先にある、仮面ライダーマッハの力の全開だ。
その本領発揮のダメージのリバウンドすら気にしない、音よりも速いスピードと高いエネルギーを剛は身に纏っていた。

…小手調べは、終わりだ

スカルドーパントは、４人のライダーに向けて、宣言する。
身構えるライダー達に、楽しそうに…そして、決意するかのように言った。

…男の、戦いだ！
そう言ったスカルドーパントはスカルマグナムを捨てて、４人に殴りかかる。
それを聞いた一同は、理解した。
Wは、翔太郎とフィリップは、自分の剣たるプリズムビッカーを地に置いた。
アクセルは、竜は自身の武器たるエンジンブレードを投げ捨てた。
マッハですら、自分のゼンリンシューターを投げ捨てた。
殴り合いが、始まった。

「…付き合えん」
チェイサーだけは、つまらなそうに、大斧シンゴウアックスを地に刺した。
マッテローヨ！と…誰を待っているかがわからない音声が虚しく響いた。

＝＝＝

「俺は…亜樹子と結婚した！振り切らせてくれ！」
「今更、言うな！」
スカルドーパントと竜が、娘をめぐって殴り合いを始める。
「これがあんたの知らない、俺たちの、力だぁ！」
「…面白い、こい！翔太郎！フィリップ！」
Wエクストリームが、スカルドーパントに自分達の力を見せつける。
…そして、剛は…
「俺ァ…今だけは、あんたを、ドーパントともロイミュードとも仮面ライダーともおもわねぇ！」
「…ほう?」
「俺は…あんたを、今だけは本当の俺の親父だと思わせてくれ…それを、マッハで乗り越えてみせてやる！」
「面白い…貴様みたいな、息子を持った記憶は無いがな！」

そう言って、スカルドーパントに立ち向かう。
永遠に思える刹那の中で、スカルとマツハの拳が交錯する。
それは…まるで、本当に親父と息子の成長の確かめ合いのように。
彼らには、恨みも怒りも憎しみも、なかった。
ただ、２人の熱い、男が居た。
…そして…

「俺の勝ちだ、『鳴海荘吉』！」
「それは…俺の『相棒』の名前だ……俺は『スカルドーパント』、『仮面ライダースカル』ではあっても…それはもう1人の、俺の、名前だ」

剛は、スカルドーパント…仮面ライダースカルであり、鳴海荘吉の相棒だった…スカルメモリの化身を見下ろしていた…

エピローグ：仮面ライダーの、明日

…遠慮、するな
スカルドーパントは、剛に向けて、言う。
…『俺』、否…『俺たち』は、娘しかいなかったから、これはこれで幸せだった
まるで、遺言のように、言う。
…娘を取った憎いあいつか、翔太郎にまかせるべきことだが…
絞り出すように、言う。
…今だけは…『俺たち』の自慢の…息子に頼みたい…やってくれ、頼む

それを受けて、剛…仮面ライダーマッハデッドヒートは、拳を下ろした。
その視線の先には、スカルドーパントの急所にて、その本体である…スカルメモリが、剛の瞳に映っていた。

＝＝＝

２日後、久留間市、警察署。

「…俺は、俺たちは、そのロイミュードを倒した…報告は以上だ、霧子…俺は帰る」

チェイスは、そう、ドライブピットの面々に一言だけ告げて、去っていった。
周りの人間は口々に、チェイスの無愛想さをとがめている。
霧子ですら、チェイスへと難しい顔をしていた。
だが、その場に居た、剛だけは…優しい顔をしていた。
…あいつにも、ちょっとは思うところが有ったのか、と。

そこに、不意に、剛は進ノ介に声をかけられた。
「なんか、お前…大きくなった気がするよ」
まるで、弟の成長を喜ぶ、兄貴のようだった。
それを受けて、剛は小さく笑うと…こう、返した。

「俺は、俺が絶対たどり着けない相手を、乗り越えた気がする…お祝いに、缶コーヒーかカルアミルクでもおごってよ」

…カルアミルクは、日本ならちょっとダメかもな

進ノ介は、笑って、なにも聞かず、剛と喫茶店に出かけた。

進ノ介、お前まだ勤務時間中だろ！と言うツッコミがドライブピット内に響き渡った。

＝＝＝

そんなフィリップの心配に答えるかのように、翔太郎は呟いた。

「…足りねえ」

ふむ、何が足りないのだろうか…フィリップは思案した。
何か、スカルドーパント…自分達のもう1人の先達に対する、思い入れなのか後悔なのか…

「５０万ぽっちじゃ…俺たちの生活費が……まだ足りねえええええ！」

…やれ、ファング！
そう、無表情にフィリップが呟くと、自身の守護者たるガイアメモリ…ファングメモリを自律稼動させて
翔太郎をそれはそれはボコボコにした、とか。
だが、同時に…フィリップは、安堵していた。
ああ、このハーフボイルドは、僕の思った以上に強かったな…と。

「フィリップウウウウー・ファングメモリを止めてくれぇぇぇぇ！」
まあ、彼と…鳴海荘吉と比べたら、だいぶ駄目な相棒だが、と付け加えながら。

＝＝＝

「私も、もうちょっとしたら事務所に向かうよ、お父さん……」

＝＝＝

ましてや、飛び道具で一方的に撃ち抜くなどという、卑劣な手では。

「…ならば、ふむ…彼、スカルドーパントをある一定以上ダメージを与えて、帽子を狙うと良い、そうすれば…Xはコアとして、たまらず飛び出すだろう…何故なら、偶発的に生まれたせいで完全に一体化出来てない、言うなればロイミュードとドーパントの『半分こ怪人』であるスカルドーパントのロイミュードとしてのコアは、そこなのだから」

それだ！と言う全員の意見の一致で、仮面ライダー達は一斉に喜んだ。

…そして、戦いが決着した今。

今まで静観していたチェイスがいきなり動いた。

イッテイーヨ！

シンゴウアックスの一閃により、Xのコアは真っ二つに切断されたのだ。

そして、コアがなくなったスカルドーパント…『仮面ライダースカル』は死に…

後には、スカルメモリだけが残されたのだ。

＝＝＝

そして、再び現在、照井家

その、鳴海荘吉の遺品にて魂の片割れのガイアメモリ…スカルメモリは、今は、照井家の玄関に飾られていた。
亜樹子がどうしても、と貰いたがったからだ。
…全ての仮面ライダー達にも、異論は、なかった。
きっと、スカルメモリ、そのものからも。

そして、照井家ではスカルメモリを、『お父さん』と呼んでいる。
だって、誰よりも…強く、優しく、美しい…そんな、風の街を愛した男の魂を宿した、紛れもない『仮面ライダースカル』なのだから。
照井家の2人には、紛れもなく、『お父さん』だった。

そして、亜樹子は竜を見送って、慌てて着替えて自分を待つ探偵事務所へ向かう。

…俺に似合わず、騒がしい、娘だ
ふいに、亜樹子はそんな声を聞いた気がする。

だが、そこには…爽やかなそよ風が、風都を撫でるだけだった…

＝＝＝